

共生共栄共義主義について（後編）

이 상 현
李 相 憲
韓国統一思想研究院院長

一、共生共栄共義主義

(2) 共栄主義

これは理想社会の政治的な側面を扱った概念です。特に資本主義の政治理念である民主主義に対する代案としての側面です。周知のごとく資本主義社会の民主主義は自由民主主義であって、英国の清教徒革命、アメリカの独立戦争、フランス革命等の結果として、「自由・平等・博愛」をスローガンとして出発した政治理念です。

民主主義は人民が主人となって政治をするという思想です。人民が主人となって行う政治がすなわち民主主義政治

です。アメリカの十六代目の大統領、リンカーンの「人民による、人民のための、人民の政治」という有名なゲティスバーグの演説によく表されています。民主主義政治は、本質的に、人民の自由と平等を実現するための政治です。民主主義政治が多数決主義や議会政治を主張するのも、その最終目的は人民の自由と平等の実現にあるのです。自由と平等は表裏の関係にあつて、自由なき平等も、平等なき自由もありません。ここでしばらく「人民」とは何か、考えてみましょう。市民革命当時の人民は絶対王朝の下で支配を受けていた被支配階級を意味したのですが、今日は、

階級を超越した国民大衆の意味で使用されています。けれども今日、権力がしばしば独裁に流れることがあるので、人民とは、権力層や富裕特権層ではない、大多数の国民の意味に解釈していいと思います。

民主主義が実施されて二百年になりましたが、果たして国民大衆の自由と平等が実現されたでしょうか。答えはノーと言いかありません。なぜならば、自由民主主義は資本主義を政治的に支えてきたからです。資本主義は、その構造的矛盾によって富の格差、富の偏在を招いて多くの国民に経済的な不平等と不自由をもたらしたのです。

経済的な不平等と不自由は、そのまま政治的な不平等と不自由に連なってきました。特に多くの貧民層の自由と人権は、しばしば民主主義の名のもとに蹂躪されたのです。それにまた、主権は名前だけの「人民の主権」であつて、実質的には、政党人たちが選挙という名前で莫大な資金を投入して勝ち取った利権でしかありません。そのため選挙戦とは、要するに政治的な利権の争奪戦にすぎなくなつてしまいました。そして神聖であるべき「人民のための、人民による、人民の政治」になりえず、「政党人のための、政党人による、政党人の政治」になってしまいました。

自由民主主義のこのような欠陥のために、共産主義者たちは自由民主主義を権力層や富裕層のためのブルジョア民主主義であつて、国民大衆の民主主義ではないと告発したのです。そして第二次世界大戦以後、彼らは、労働者や農民のための共産主義こそ本当の人民民主主義であると主張してきました。とにかく真なる自由と平等と博愛を実現してくれると思つた民主主義は、二百年を過ぎた今日でも、まだその目的を達成していないのが事実です。その原因はいったいどこにあるのでしょうか。

それは市民革命により、専制君主制を打倒して実現した民主主義が、基本的には個人の権利、自由、平等を主張する個人主義をその内容として成立したからです。個人の個性や人格や価値を重要視するという点で個人主義は尊重されて良いのですが、政治と宗教の分離によって、個人精神の指導原理としてのキリスト教が、その機能を十分に果たさなくなつてからは、個人主義は利己主義に流れたのであり、したがって民主主義は利己主義的個人主義を基盤として成立したという結果になつてしまったのです。

このような利己主義的個人主義が経済人の精神を支配し、政治家の精神を支配してきたので、資本家たちは、た

えず利潤の極大化を追求してきたのであるし、政治家たちは政権を利権視しながら、自由選挙、公明選挙の名のもとに、莫大な選挙費を、あたかも利権獲得のための投資のよきな気分投入してきたのです。そして資本家や政治家たちの執拗な利潤追求と政権欲がもとになって、今日、さまざまな不正腐敗や各種の犯罪が氾濫するようになったのです。

これは何を意味するかといえは、民主主義は出発からその標語である自由、平等、博愛を完全に実現しえない限界性をもっていたということですから。すなわち政教分離の民主主義のもとで、個人主義は必然的に利己主義に流れざるをえないということですから。しかし、そうであっても自由民主主義がすべての点で失敗したわけではありません。ある一つの点で、明らかに、その機能を果たしたのです。それがすなわち信仰の自由の保証です。したがって、自由民主主義国家において、春に多くの花が満開になるように、各種の信仰の花が満開となったのです。

ここで神の摂理的な観点から民主主義の意義を考えてみることにします。民主主義が信仰の自由を保証したのは神の摂理と関係があるからです。神の摂理からみた場合、民

ここに絶対君主制でなくて、メシヤ王国であったならばというのは、単なる仮定ではありません。神の摂理から見るとき、実際にメシヤ王国が建てられるようになっていたからです。

それでは、そのことについて具体的に説明します。西洋歴史において、八世紀末から九世紀にかけて、フランク王国が大きく発展して西ローマ帝国を復活しました。その王がチャールス大帝です。ところで神の復帰摂理から見るとき、新約時代のチャールス大帝は旧約時代のユダヤ王国のサウル王に相当する君主です。アブラハムから八百年ころ、サムエル預言者によって油を注がれて、サウルはユダヤ王国の君主になりました。同じくチャールス大帝も、八百年に、法王レオ三世によって冠をいただき、西ローマ皇帝になりました。統一原理では、チャールス大帝の治世を旧約時代のユダヤ王国に対応するキリスト王国と呼んでいきます。これは旧約時代のユダヤ王国にメシヤが降臨して世界を統一し、神の真なる愛を中心としたメシヤ王国を建てるように神が摂理されたのと同じく、新約時代にも、キリスト王国に再臨のメシヤが降臨して、神の真なる愛を中心としてメシヤ王国を建てるように摂理されたことを意味しま

アメリカの象徴である自由の女神像



民主主義の出現はメシヤ王国の前段階として現れた政治理念です。ここで民主主義が絶対君主体制を打倒した市民革命によって立てられたという事実^{に留意}する必要があります。もし当時の体制が絶対君主制でなくて、神の真なる愛を実現するためのメシヤ王国であったならば、市民革命は起きたはずはありません。人類はメシヤ国家において、真なる自由と平等と博愛を満喫しながら、日々の生活を楽しんではずです。

す。

ところが旧約時代のユダヤ王国において、君主たちは三代にわたって神のみ旨に適うような摂理的な条件を立てなかったために、神はユダヤ王国を南北朝に分立させたのであり、ついにはサタン側の王国である新バビロニア王国に占領されて捕虜になるようにさせたのです。これでユダヤ王国を通じてメシヤ王国を建てようとした神の摂理は失敗に終わったのです。

同じく新約時代のキリスト王国においても、君主が神のみ旨に適う摂理的な条件を立てなかつたので、神はキリスト王国を東西王朝に分立させてから、十字軍戦争の受難と法王のバピロン捕囚の受難を与えたのです。そしてサタン側の王国である絶対君主制が形成されるようになり、また、そしてキリスト教の君主を通じてメシヤを迎えさせて、メシヤ王国を建てようとした神の摂理が旧約時代と同じく挫折したのです。

しかしながらメシヤ王国実現の摂理が放棄されたのでは決してありません。新しい方法でもってメシヤを迎える摂理が開始されました。それは下からの民意によってメシヤを迎える摂理です。この摂理は旧約時代にも、新約時代に

も行われたものです。下からメシヤを迎える摂理のポイン
トは、神の摂理をささげるサタン側の王国、すなわちサタ
ン側の君主制を崩壊させて、民意が自由に現れるような社
会環境を造成することにあります。そのために個人の意志
が尊重される民主主義思想を普遍化させたのです。すなわ
ち旧約時代に、神はアベル側の異邦民族ペルシアを立てて、
イスラエル民族を捕虜にした新バビロニア王国を打倒し、
イスラエル民族を帰還させたのです。そしてマラキ預言者
を迎えてから、メシヤ降臨の準備をするようになりました。
その一環として、イスラエル民族の王位を空位にしておい
た後、紀元前四世紀末からヘレニズム文化圏に属するよう
にされたのです。

ヘレニズム文化圏は、個性を尊重する民主主義思想を基
盤とした文化圏であったので、イスラエルの民族は、この
文化圏の中で個人の意志を自由に表すようになったのであ
り、民意によってメシヤを迎えることが可能になったので
す。統一原理ではこのような社会を「民主主義型の社会」
と表現しています。

それと類似した摂理が新約時代にも行われました。すな
わち神は、神の摂理を妨害するサタン側の勢力を崩壊させ

再臨のメシヤを迎えることにその目的があるのであって、
自由、平等、人権、博愛等の問題を根本的に解決するよう
になつていたわけではありません。ただ信仰の自由のみを保
証すればよかったです。その点において、民主主義は責
任を果たしたのです。民主主義が信仰の自由を保証したた
めに、その信仰の基盤の上にメシヤの再臨が可能であつた
からです。そしてすべての問題は、このメシヤの教える神
の真なる愛と真なる真理によって根本的に解決するので
す。

すなわち、真なる愛と真なる真理を持ってこられる再臨
のメシヤを中心として、王国が立てられることによつて、
初めて根本的な解決が可能になるのです。以上、神の摂理
的観点から、今日の自由民主主義の限界性について、そし
て民意によつて再臨のメシヤを迎えることができるように
信仰の自由が保証されたという点で、民主主義が責任を果
たしたという話をしました。

それでは共栄主義の真の内容を説明します。一言でいえ
ば、共栄主義は共同政治に関する理論です。共同政治とは、
万人が共に政治に参加する政治のことです。「万人共同参
加の政治」こそ真の意味で民主主義の理念になつていま

る摂理を行われたのです。十六世紀にマルチン・ルターを
立てて、サタンによつて世俗化したキリスト教を改革する
宗教改革運動を起こす一方、十六世紀末から十八世紀後半
にかけて、人間の理性を尊重し、旧時代の権威や特権、そ
して社会的な自由や不平等に反対する啓蒙主義運動を全ヨ
ロッパに展開させたのです。この運動を土台として、自
由、平等、博愛をモットーとする市民革命を起こさせて、
サタン側の君主制である絶対君主制を崩壊させたのです。
このようにして近代民主主義が成立したのですが、すでに
述べたように、民主主義はどこまでも民意によつてメシヤ
を迎えるための新しい理念なのであって、決して真なる自
由、平等、博愛を実現する理念ではなかったのです。

そして旧時代の宗教が人間の個性や自由や権利を無視す
るなど、あまりにも誤りが多かったので、民主主義政治は
出発から政治と宗教を分離せざるをえませんでした。その
ために、民主主義は、人間が従わなければならない価値観
の絶対基準が失われてしまい、ここに必然的に民主主義は
利己主義的民主主義となつたのです。そして今日のような
大混乱を起こすようになりました。

言い換えれば、民主主義の出現の意義は、民意によつて

す。万人の共同参加はいうまでもなく、代議員選出を通じ
た政治参加をも意味します。ここで代議員選出による政治
参加が共栄主義の共同政治とするならば、今日の民主主義
政治と違うところがないではないか、という疑問が生じる
かもしれません。けれどもそこには基本的な違いがありま
す。そのことについて具体的に話します。

共栄主義の共同政治では、まず第一に、代議員選挙にお
いて立候補者の関係はライバル関係ではなく、神の真なる
愛をもとにして、神の代身であるメシヤを人類の父母とし
て侍る家族的な兄弟姉妹の関係です。第二に、代議員選挙
における立候補者たちは自分の意志によつて出馬するので
はなく、多くの隣人(兄弟)の推薦によつて出馬するのです。
真なる愛を中心とする兄弟姉妹の関係にある有能な人材は
お互いに譲り合うからです。第三に、その選挙は莫大な費
用と副作用を伴う投票方式ではなくて、厳粛なる祈りと儀
式が伴う抽選方式で行われます。その時、当選した候補者
も当選しなかった候補者も、みな当落が神意によることが
分かって感謝し、全国民も神意に感謝しながら、投票の結
果を心から喜んで受け入れるのです。

このように共栄主義において、共同政治は全世界が一つ

に統一されたメシヤ王国の政治であるために、神の真なる愛を中心とした「共同参加の政治」であるし、また神を代身されるメシヤを父母として侍る万人が、父母の愛を受け継いだ兄弟姉妹の立場で共同政治に参加するために、共同政治は「人民のための、人民による、人民の政治」でなく、「人類の真の父母を中心とした、兄弟のための、兄弟による、兄弟の政治」であり、その政治は正確に言って、民主主義政治でなく天父主義を中心とした兄弟主義政治です。

ところで、民主主義が今日まで成功できなかった自由、平等、人権尊重、博愛等は、天父主義を中心とした兄弟主義政治によって初めて実現されるのです。そういう意味において、共栄主義の共同政治は兄弟主義的民主主義であると表現することもできます。ここで特に指摘したいことは、「兄弟主義」自体は常識的な意味の同胞主義といいますが、ここでいうのは、今日のような国境の中に閉じこめられた地域的な国民が、お互いに兄弟の関係を意味するような同胞主義ではありません。全世界が一つの国家に統一され、全人類が一つの中心を父母として侍り、その父母の子女として互いに兄弟姉妹の関係を結んだ方式の同胞主義であっ

最後に、共栄主義における共同政治と三権分立について話します。我々は民主主義政治が立憲政治であり、立憲政治は律法、司法、行政の三権分立を骨格とする政治であることを知っています。そして共栄主義の共同政治も、代議員が政務に参加する政治であって、三権分立を認めるのはいうまでもありません。

しかし共栄主義の場合には三権分立は、モンテスキューの主張のように、権力の乱用を避けるために権力を三分するということではなく、立法、司法、行政の業務の円満な調和のために、「三府の業務分担」という意味での三権分立です。そして権力の概念も従来とは違います。従来の権力の概念は、国民を強制的に服従させる物理的な力を意味したのですが、共栄主義においては、権力は真なる愛の権威をいうのであって、対象をして、主体の真なる愛に心から感謝の念を抱きながら主体の意思に自発的に服従させる情的な力です。これはあたかも身体の中の器官が、人体を生かすという共同目的のために、さまざまな生理的機能を各々分担して互いに有機的に協調するように、三府も国家存立の三大機能（立法機能、司法機能、行政機能）を各々分担して、共同理念のもとに有機的、調和ある協調体制を成

て、真なる意味の四海同胞主義です。

今日まで四海同胞主義の理論があっても実現しなかったのは、世界統一がなされず、人類の真なる父母が出現しなかったからです。その点においては、民主主義も同じです。今日まで、民主主義の理念が一〇〇パーセント実現できなかったのは、上記のようないくつかの理由の他に、民主主義理念自体が、超民族的、超国家的であるにもかかわらず、現実的には民族的、国家的特殊性の制約を受けていたからです。

そしてその点においてメシヤ王国も同じです。先にメシヤ王国について話しましたが、メシヤ王国は決して地域的な国家ではありません。メシヤが降臨するのは一地域の国家である選民国家ですが、メシヤ王国の形成は世界統一が成されてから可能になるのです。しかし共生共栄共義主義は、世界統一の前でも、指導者たちが努力さえすれば、神を真の父母として侍りながら、ある程度まで実現することができます。そうすることによって、現在の混乱はひとまず、相当の程度まで收拾することが可能です。先に現在の資本主義の次は必ず共生共栄共義主義が来るをえな

いと云ったのはこのためです。

すところに、三権分立の真なる意味があるのです。それで統一原理には、このような協調関係にある立法府、司法府、行政府を各々人体の肺、心臓、胃腸に比喻しています。そして各臓器に分布されている末梢神経が頭脳の命令を受けて各臓器に伝達しながら、少しも誤りなく緊密な協調をなさしめ、人体の生理作用を円満にさせるように、理想社会においては立法府、司法府、行政府は真なる愛の主体である神のみ旨を、一定の伝達機関を通じて伝達し、円滑に協調するようになっています。ここで特に明らかにすべきことは、神の創造において、地上天国の理想像は人体を基準として構想されたということです。したがって、理想世界の国家の構造は人体構造に似ています。先に立法府、司法府、行政府を肺、心臓、胃腸に比喻しましたが、実は肺、心臓、胃腸をモデルとして三つの機関を立てたのです。

人間の墮落によって、国家は本然の在り方を失い非原理的な国家になりましたが、理想国家の構造の骨格は、そのまま似ています。それで人体の臓器（肺、心臓、胃腸）の機能が永遠不変であるように、立法、司法、行政の三府とその機能も原理的世界においては永遠不変です。しかし理想世

界の立法、司法、行政の内容は現在の非原理的なものとは一致しません。それは非原理的な権力が物理的な強制力であるのに対して、原理的な権力は真なる愛の情的な力であるという点で、両者は違うのと同じです。(しかし、ここでは原理的な立法府、司法府、行政府の機能についての説明は省略することにします)。

(3) 共義主義

共義主義は共同倫理の思想です。これは、すべての人が公的にも私的にも道徳・倫理を遵守し、実践することによって、健全な道義社会すなわち共同倫理社会が実現するという思想です。今日、資本主義社会や、ソ連、東ヨーロッパの前共産主義社会、中国や北韓の現共産主義社会を問わず、人民大衆の精神が持たなければならない価値観すなわち道徳観念、倫理観念は、ほとんど消えてしまい、その結果、いろいろな不正腐敗の現象や社会的犯罪が氾濫し、世界は大混乱に陥っています。そしてこの価値観の崩壊を見て慨嘆しながらも、だれも收拾の方案を提示しえないでいます。

共義主義はこのような価値観の崩壊を根本的に收拾し

義主義社会であつて、それが再臨のメシヤを中心とした社会です。したがって再臨のメシヤの教えは、キリスト教の中心真理が含まれた教えであり、儒教の神髄が含まれた教えであり、仏教の核心が含まれた教えであつて、あえて一教派の看板に固執する必要はないのです。

同時に、共生共栄共義主義社会は今までの宗教の教えのように、未来を準備するための理論としての社会ではなくて、メシヤと共に現実の中で、真の愛の生活、すなわち天国生活を営む社会です。その社会は万人が同一なる価値観を持つて生きるために、それまでの信仰中心の宗教教理は実践中心の生活倫理となるのです。未来社会のそのような側面を、共同倫理の社会すなわち共義主義社会といふので

す。次は共同倫理社会の特徴について説明します。まず家庭生活は、侍る生活を中心とする家庭倫理の生活です。人類の真なる父母に侍る中で、各家庭ごとに父母、夫婦、子女が互いに円満な授受作用を通じて、神の真なる愛が分化された、父母の愛、夫婦の愛、子女の愛または兄弟姉妹の愛を実践するのです。そのとき家庭秩序が立てられ、永遠なる平和と歓喜と幸福が成就します。このような家庭でもつ

て、だれでも、いつでも、どこでも、道徳と倫理を守ることによって、地上に健全な道徳社会を立てようという主張です。言い換えれば、資本主義社会と共産主義社会の次の段階として到来することになっている理想社会は、共生共栄の社会であると同時に、万人が地位の高低を問わず平等に同一なる倫理観を持つて生きる共同倫理の社会のことであつて、このような共同倫理の社会の実現に関する理論がすなわち共義主義です。

未来の理想社会には宗教は必要ではありません。なぜならば宗教の目的がすでに達成されているからです。キリスト教の教えの目的は、再臨のメシヤを迎えるまで信仰を堅持せよということです。儒教の目的は大同世界を成すときまで儒教の徳目を実践することです。仏教の目的は理想社会である蓮華蔵世界が地上に実現するまで仏道を治め、佛法を守ることです。したがって再臨のメシヤを迎えて、神の国が実現されれば、キリスト教の目的は達成されるのであり、地上に大同世界が成就されれば、儒教の目的は達成されるのであり、地上に蓮華蔵世界が実現すれば、仏教の目的は達成されるのです。

すべての宗教の目的が達成された世界が正に共生共栄共

て成就された世界が侍義生活を中心とした家庭倫理の社会です。

二番目に、社会生活は三大主体思想における三大主体の真なる愛の運動によって支えられるようになります。三大主体思想によって、三つの中心すなわち家庭の中心である父母、学校の中心である先生、主管の中心である管理責任者(社長、団团长、国家の責任者等)の三大主体が、神の真の愛を各自の対象たる子女、学生、従業員(国民)に対して限りなく施すことによって、二次的に、その対象たち(子女、学生、従業員、国民たち)の相互の愛を誘発して、全社会が愛の園となるような社会です。そのとき、すべての格差は真なる愛によって消え去るようになります。貧困は、少しでも余分に持つ人たちの真なる愛によってすぐ消えてしまいます。疎外された者は、管理責任者の真なる愛によって、すぐ慰められます。知識の枯渇を感じる者は、有識者の真なる愛によってすぐその枯渇が満たされます。これが全社会が愛の園となるということの意味です。かわいそうな人を見れば助けたくてたまらないのが神の真なる愛であるからです。

そのとき、先生の真の愛を中心とした学校や、管理責任



者の真なる愛を中心とした職場や国家は、すべて家庭倫理の拡大型としての倫理体系となるのです。すなわち先生を中心とする学校は、父母の真の愛を中心とする家庭が教育の側面で拡大された拡大家庭であり、管理責任者の真なる愛を中心とした職場や国家は、家庭が管理や統治の面において拡大された拡大家庭です。このようにして社会全体が神の愛によって満たされるのです。そのとき、社会全体が永遠なる平和と歓喜と幸福の世界となるのです。

このようにして長い間の人間の念願がいに成就されることよって、六千年の間、神が切に願われた創造理想世界が実現されます。数多くの思想家や宗教家が夢見た理想が実現されるのです。このような社会がすなわち共義社会であると同時に、共生共栄共義主義社会です。

以上でもって、共生共栄共義主義の単純概念としての共生主義、共栄主義、共義主義のそれぞれについて説明しました。ところで共生主義、共栄主義、共義主義の三者は別々に扱われるものではありません。これらが渾然一体となった中で、初めて神が理想とされた創造理想世界が実現されます。したがって、一つの名称として、共生共栄共義主義と呼ぶのです。

(完)

光言社のほん 新刊案内

信仰と生活

第3集 私の神様・李耀翰



信仰と生活
第3集 私の神様

李耀翰先生は1952年以來、40年近く文先生ご夫妻と苦勞を共にされた信仰の先駆者です。本書は摂理の進展に伴って後輩たちを教育してこられた李先生の、珠玉の説教集です。み言をいかに日常生活の中に生かすかを分かりやすく解説します。

A5判 307頁
定価1400円
(本体1359円)
〒260円

●ご用命は光言社発送センターへ
TEL03-3384-4225
FAX03-3384-4374

第五章 神論

神論の意味

神論とは神についての理論または教理、神についての言葉を意味する。したがって、神論こそが厳密な意味でテオ(神) ロギア(言葉)、すなわち神学(theology)である。

これは神学でも最も狭い意味での神学である。第一章で、神学とは神の使信を状況に照らし合わせて学的に説明するものであると定義したが、それは広義の神学の定義であって、神論のみならず広く創造論、墮落論、キリスト論、救済論、終末論なども入る。また、それらを体系的にまとめた組織神学も入るし、さらにはもっと広く、聖書学、教会史、実践神学(伝道学や説教学など)、哲学的神学なども入る。これらはいずれも領域の相異はあっても、使信を状況に照らし合わせるといふ点では同じであり、広義の神学に属する。その中で、神という領域に絞った狭義の神学としての神論を取り扱うのが本章の課題である。